

三陸水産業復興の鍵を握る 岩手の秋サケと宮城の銀ザケ



【研究課題名】

東日本大震災後の産地価格変動に関する調査研究（基盤強化費）、
三陸養殖銀ザケの生産及び流通に関する調査（水漁機構委託）

【実施年度】平成23～24年度

経営経済研究センター 需給・経営グループ

清水幾太郎

目 的

岩手県の秋サケ漁業と宮城県の銀ザケ養殖は地域産業を支える重要な漁業です。2011年3月の東日本大震災によって漁業養殖施設、魚市場、水産加工場が破壊されたため、その年の秋に回帰するサケの水揚げと加工処理ができなくなり、秋サケ価格が暴落することが心配されました。また、銀ザケは1年間生産できなくなったため2012年春の水揚げが期待されましたが、価格暴落が起きました。そこで、本研究では震災後の秋サケ価格の推移と水産加工場の処理能力の回復状況及び養殖銀ザケの価格暴落要因を分析しました。

結 果

秋サケ産地価格の暴落は回避されました。その原因は、①サケ定置漁業もサケを主原料とする水産加工場も回帰する秋サケへの期待がモチベーションとなり回帰時までには震災前の約6割が復旧したこと、②復旧した秋サケ加工処理能力（13,200トン）が減少した岩手県の秋サケ沿岸漁獲量（7,500トン）を上回ったためであることがわかりました（図1）。

養殖銀ザケの産地価格が暴落した要因は、①チリ産銀ザケの大量輸入により国内市場価格が暴落したこと、②冬季の水温低下で水揚げ時期が遅れて6月に集中したこと、③原発事故の風評で需要が減少したため冷凍保管を避けて出荷が集中したこと、④出荷できなかった間に市場が輸入サケマスに置き換わったためであることがわかりました。養殖銀ザケの価格下落は冷凍のチリ産銀ザケと価格連動しているため、養殖銀ザケはフレッシュ出荷が可能であることをアピールポイントとして

差別化を図ることが課題として明確になりました（図2）。

波及効果

養殖銀ザケは年間1万トン生産され、今や三陸沿岸の秋サケ漁獲量（1.1万トン）に匹敵します。水揚げ時期の異なる秋サケ漁業及び銀ザケ養殖と水産加工業との連携のあり方が三陸水産業復興への鍵を握っていると期待されます。



図1 2011年の秋サケ沿岸回帰時における加工処理能力（推定値）と実際の漁獲量（トン）

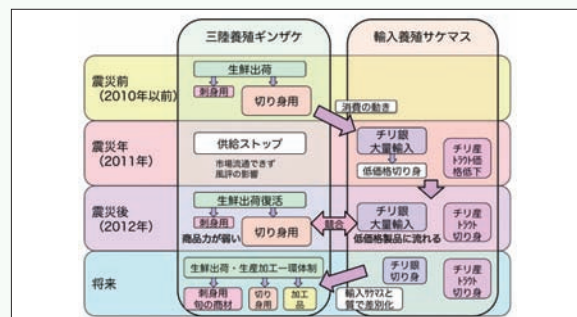


図2 震災前後における三陸養殖銀ザケと輸入養殖サケマスの流通比較

参考文献

清水幾太郎 (2011). 三陸における震災後の秋サケ加工. 月刊漁業と漁協, 585: 28-31.
清水幾太郎 (2013). 三陸水産業の復興～養殖銀ザケを事例に～. 月刊漁業と漁協, 601: 20-23.